

# 「ほろむい七草」復活に道



ホロムイチゴ



ホロムイリンドウ



ホロムイコガイ



ホロムイツジ



ホロムイスガ



ホロムイクガ



ホロムインウ

# ふらっと南幌会報

発行元

NPO  
ふらっと南幌

南幌町栄町  
4丁目4番19号  
378-2203

「ふらっと南幌」のプロジェクトが急速に加速する中、内部の認識を共有しようと、一月二十六日、運営委員を含めた第二次「理事会」を開いた。昨年度e-waterプロジェクト事業の報告と千歳、南幌、札幌間のロングトレイル開設などについて協議した。事業報告では、幌向湿原固有の「ほろむい七草」をすべて発見、培養実験などを開始、「復活に道」が開か

れた。特に北欧でクラウドベリーとして珍重されている「ホロムイチゴ」には、「水ゴケ」が必要であるため熊本の東海大学星研究室の協力を得ながら、栽培実験が進んでいる。また、商品化が可能で多様な土壌で栽培できる「コケもも」の育成試験も視野に入れた活動を申し合わせた。今後、北海道開発局との連携によって千歳川流域に設置される「遊水池」(長沼・剣淵右岸地区、千歳・根志越地区、南幌・晩翠地区、江別・江別太地区、恵庭・北島地区、北広・東の里地区)の有効活用への協力の検討される予定。ロングトレイル開設では一昨年の「全道フットパスの集い」で 四頁へ

## 創刊号を迎えて

代表理事  
濱田暁生

待望の「ふらっと南幌会報創刊号」をお届けします。

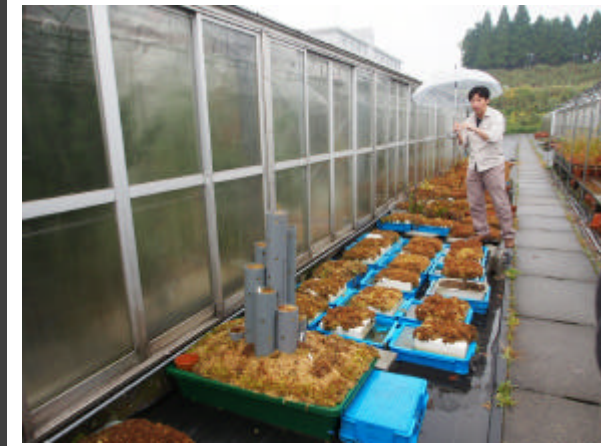
以前よりNPO法人としての活動状況を会員が情報共有するための会報の必要性が検討されて来ましたが、この度、事務局内に広報担当の体制が整い発刊することが出来ました。

私達のNPO法人の事業も、フットパス・ウォーキングパスを中心とした「農都共生」の交流活動から、故辻井達一先生の貴重な御示唆によって「幌向湿原固有種植生の再生・保全・活用をめざす「ほろむい七草プロジェクト」、さらには、地元農家と都市の消費者をつなぐ「エコ田んぼオーナー制度」への挑戦、近年南幌町

## エコ田んぼ オーナー 募集中

自然の中で安心・安全な米作りの収穫体験をしてみませんか？過去四年間、無農薬・無肥料で栽培を続けた自然農法水田(エコ田んぼ)のオーナーを募集いたします。  
オーナー条件、健康や自然環境に気づかい、生態系の保全に配慮、おいしいお米を作

り、食べたい人。  
募集規模、一区画三十坪・一シーズン二万五千円(共同名義可)玄米四五キロが目安。ゆめぴりか。最低保証新米三十キロ。五月田植え、十月頃刈り取り予定。田植え祭りや収穫祭も実施予定。



上) 東海大学農学部応用植物科学科 星良和准教

下) 実験棟：水田でのミスゴケ栽培状況



札幌、南幌開設したのに続き新千歳空港、南幌までを新たに作るもの。縄文遺跡群や「松浦武四郎」が歩いたとされる「古山街道」を辿る八十キロを越える予定。

(雪解けを待ち四月中に実施)また南幌、赤平の「北海幹線用水路」を中心に名所旧跡を辿る道作りにも、南幌が「メツカ」になる日も近い。

## H25年度の月例フットパス予定 (毎月第三日曜日)

- 四月・しらかば樹液採取
- 五月・春の草花と野鳥観察
- 六月・雄大な夕張川を望む  
農村めぐり
- 七月・運河祭りと運河下り
- 八月・三重農村花街道  
夏野菜食べ歩き
- 九月・鶴沼と丹頂鶴の  
飛来地めぐり
- 十月・キャベツ収穫体験と  
キムチ作り体験
- 十一月・南幌温泉へGO!
- 十二月・街なかフットパス
- 一月・新春 温泉かんじき
- 二月・大雪原霧氷かんじき
- 三月・大雪原かんじき

ふらっと南幌  
www.flat-nanporo.com

発足当時の活動はネットで見てね!

### 小磯 修二 氏



1972年京都大学法学部卒業。国土交通省を経て1999年釧路公立大学へ。2012年から北大公共政策大学院特任教授。地域政策研究の分野において、地域課題に応える実践的な研究プロジェクトを数多く展開。中央アジア地域等で地域開発研究分野で国際貢献活動に従事。専門は地域開発政策、地域経済。公職は国土審議会委員、北海道観光審議会会長など

### 地域総合開発―歴史から未来へ

## 「湿原の保護」=辻井達一氏の遺志 石狩川フォーラムがスタート

主催：石狩川フォーラム実行委員会  
後援：北海道開発局、北海道、北海道河川財団、石狩川振興財団、北海道環境財団、北海道土地改良区事業団連合会、農村空間研究所

いつしか、ふらっと南幌の顧問的存在になつてい た北海道環境財団理事長の故・辻井達一氏。終生自然を愛した先生の遺言とも言える「石狩フォーラム」がスタートした。石狩川は氾濫を繰り返して、肥沃な土地を育んで来た。この百年で全国有数の穀倉地帯に変貌するとともに、生態系も変化した。だが、自然環境は残っている。地域活性化を含めて石狩川を再発見したい。月一回のペース（十五回は決定）で紀伊国屋書店一階内で開催。以下、内容抜粋で報告。

石狩川フォーラム  
実行委員会・出所

### 中村 太士 氏



昭和33年 愛知県生まれ  
昭和58年 北大大学院農学研究科林学専攻修士課程修了  
昭和68年 農学博士(北海道大学)  
平成元年 北大農学部講師  
平成12年 北大大学院農学研究院教授  
平成17年 日本森林学会賞  
平成21年 生態学琵琶湖賞  
平成23年 尾瀬賞  
平成24年 みどりの学術賞

### 全国から見た―魅力と変貌

（第一回 一月二十八日）  
石狩川は日本で長さは三位、流域面積で二位。北海道の人口の六十%、資産の五十%が集中する。明治四十三年からの河川改修で百キロをショートカットして氾濫など防災対策とともに泥炭地の排水工事により、現在の「穀倉地帯」に変貌した。残された「三日月湖」の生態系は維持されているが、陸水域や沿岸・海洋の生態系は悪化している。「国家戦略2000」では空間明示型の評価（地図化）（保全重要拠点（ホットスポット））



毎回 100名以上参加するフォーラム会場（紀伊国屋書店 1Fインナーガーデン）

（第二回 二月十三日）  
石狩川流域開発は一九一〇年（明治四十三年）「北海道拓殖計画」からはじまる。人口は百倍、GDP（国内総生産）はニューギランドを凌ぐまでになった。これほど急激に発展した地域は世界的に稀で「奇跡の北海道」と呼ばれる。昭和三十年頃から平成十五年までの農業、都市、道路、河川、鉄道、港湾などの基盤作りがこの発展を支えた。県庁所在地が札幌となり、旧内務省による強力な拓殖政策。戦後復興と同時に特定地域開発となり、泥炭改良を含む

の選定が重用とした。相補性解析という手法を用いて希少種の保全を検討もしている。その結果、石狩川流域の低地帯を重要視、(GIS)地図化する作業などの科学と政策の連携が必要とされる。「高度経済成長期」の開発事業で石狩川の形は決まった。川床の洗堀による橋脚も深刻だが、「河原」に住む生物が減少、魚類や鳥などの生態系に影響を与えた。ここ五十年で人工林など森林蓄積で改善しているが、完全な復元は不可能。これからは水、土砂、植物三つをバランスよく管理していくことだ。北海道は今後、人口が減少して管理放棄などで農地が湿原に変わることも想定される。その時が湿地層再生のチャンスかもしれない。兵庫では「コウノトリ」が住める取り組みで、お米が通常の二倍の価格でも売れている。北海道には「丹頂鶴」や「シマフクロウ」がいる。夢のある地域を目指そう。千歳川流域に作っている「遊水池群」は大きなチャンス、農業への配慮などで活用を。

河川開発などが歴史的なエポック。その後、経済成長期に世界銀行を通じたODA（国際援助）を拠点開発として札幌圏に投入。六十四年「新産業都市」に指定され、道央圏にも波及する。経済発展と環境破壊は表裏の関係。世界で代表例を紹介すると、米・テネシーや独・ルール地域だ。両方とも石炭、鉄鋼などで繁栄したが、二十世紀後半には産業の疲弊と環境悪化が深刻化。この教訓から国の政策と連携する「再生プロジェクト」を推進している、テーマは「水と緑と文化」で「観光地」を目指す。河川の自然再生はもちろん、繁栄期の産業構造物を利用した美術館や博物館をはじめ、質の高い公共施設へ変身させた「産業文化都市への道」を歩んでいる。北海道の未来もそうありたい。環境にしっかりと向かい合う地域づくりのモデルになりたい。住民、研究者、行政が密に連携、地域経済資源を利用するグラウンドデザインを描くことが重要だ。次世代へ継承するために、五十年百年の時間軸で、新しいシステムを。